【論文】

「アヴァロン」と「グラストンベリー」
――聖地にみられる二面性

国際ファッション専門職大学
河西瑛里子

要旨

イギリス南西部のグラストンベリー。伝説の島､アヴァロンと重なり合っているとされる町だ。現在はスピリチュアルな雑貨が豊富に売られるとともに、講座も頻繁に開催され、スピリチュアリティに関心をもつ人々が集っている。本稿では、現地調査にもとづき、グラストンベリーが聖地とみなされてきた様子、そのようなグラストンベリーが商品化されている様子、商品化により新たな訪問者を引き寄せている様子をみていく。

グラストンベリーは商品化されることで、固定化、理想化されたさまざまなイメージが生み出され、流布していった。実際に訪れた人々は自分でもってきたイメージを個人的に楽しみつつも、現実の世界で人々と交流し、新しい考え方に出会っている。

グラストンベリーという町は信条に関係なく、特別な場所とみなされており、「アヴァロン」という神秘的な自己探求の場と「グラストンベリー」という現実的な新しい出会いの場としての２つの側面をもつ。そしてこの２つの側面は対立するものではなく、同じ個人の中で共存可能なものである。グラストンベリーは異なる見方が共存する１つのスピリチュアルなコミュニティなのである。

キーワード

聖地、エネルギー、レイライン、アリマタヤのヨセフ、アーサー王

1　はじめに

伝説に名高いアヴァロン島（Isle of Avalon）。イギリス南西部サマーセット州に位置するグラストンベリーと隣町ストリートに関する観光パンフレットの中に描かれた、グラストンベリーを紹介するコラムの冒頭部分である。

アヴァロンとは､イギリスの伝説上の英雄、アーサー王が復活の時を待っているとされる島で、現実の世界ではなく、現実の世界と重なり合った神秘的な世界だと考えられている。このアヴァロンと重なり合っているといわれるのが、アーサー王の墓が見つかったとされる町グラストンベリーだ[1)]。ストリートが「靴メーカー、クラークス発祥の地」として小さく紹介されているだけなのに、グラストンベリーは「特別な町」として紹介されていて、パンフレットの大部分はケルト神話と町の遺跡の関わりの説明で占められている。1990 年代半ばから当地を調査しているマリオン・ボウマンも、グラストンベリーは「神聖で特別な場所」［Bowman 1993: 29］であり、「計り知れないほど多様なスピリチュアル探求者を魅きつけている」［Bowman 2005: 157］と述べている。しかし、グラストンベリーが「スピリチュアル探求者」を魅きつけているのはなぜだろうか。彼らはグラストンベリーに何を求めているのだろうか。彼らにとってのグラストンベリーとは何なのか。

スピリチュアルな事柄にオープンな町、グラストンベリーに注目している社会科学者は多く、多数の論文や報告書が出ている。これ

E-mail：j28y560ot0id5lb@gmail.com

までに行われてきたグラストンベリー研究の対象と方法を整理し、本稿の位置づけを確認してみよう。

管見の限り、1960 年代以降に公表された研究のうち、もっとも古い論文は、宗教学を専攻する大学院生であったアーヴィング・ヘクサムが、1970 年に行った調査にもとづく修士論文［Hexham 1971］である。彼はインタビューと参与観察を主とする文化人類学の方法を用いて、この頃からグラストンベリーで目立つようになっていた「変わり者たち（freaks）」、つまりスピリチュアルな事柄に関心をもつ人々とその考え方を対象にした。

2000 年代に入ると、文化人類学の方法を用いて発表された博士論文にもとづく民族誌が 2 冊、刊行されている。1 冊は 1989 ～ 1990 年の 1 年 3 か月に及ぶ長期調査を行ったルース・プリンスがディヴィッド・リッチーズと執筆した民族誌［Prince and Riches 2000］である。彼らはニューエイジ運動[2)]を西洋の人々が生み出した社会的・宗教的運動とみなし、ニューエイジ運動が実際に現れているオルタナティヴ・コミュニティとしてのグラストンベリーの姿を提示している。このオルタナティヴ・コミュニティ全体が調査対象である。彼らはキリスト教徒とニューエイジャーを異なるコミュニティに属する人々とみなしている。

もう 1 冊の著者エイドリアン・イヴァキヴは、1990 年代半ばの 3 年間、スピリチュアリティに関心がある人々が集っている、イギリスやアメリカのコミュニティを訪れ、そのうちグラストンベリーとアメリカのセドナを比較しながら分析をしている［Ivakhiv 2001］。グラストンベリーで彼が対象としたのは、プリンス＆リッチーズ［Prince and Riches 2000］でいうところのオルタナティヴ・コミュニティである。

ヴァネッサ・セージは 2004 年、修士論文執筆のため、グラストンベリーに 18 日間滞在した。そして、女神運動のイベント「女神カンファレンス」に参加した人々を現代の巡礼者とみなし、文化人類学的な調査を行っている［Sage 2005/2006］。

ダイオーニ・ヒルズとロイ・ウェルフォードは、1994 ～ 1997 年にかけて、グラストンベリーのヘルスセンターで実施されている補完代替医療の効果を明らかにするための調査を行った［Hills and Welford 1998］。補完代替医療を受けた患者に対して大規模なアンケートを行い、そのうちの一部にインタビューを実施する方法である。これは、社会学の調査方法に近いといえよう。

先述のボウマンの専攻はフォークロアであり、グラストンベリーを事例として、その土地固有の（vernacular）神話や伝説の利用形態とローカル化に関する論文を複数執筆している［Bowman 1993, 2000, 2003-2004, 2004, 2005］。参与観察やインタビューも行っているが、長期間の住み込み調査ではないし、調査の焦点はグラストンベリーという土地に固有の物語の使われ方である。

ヘクサムとそれ以外の 5 組の研究は、調査時期に 20 年ほどの隔たりがあり、スピリチュアリティに関心がある人々の状況も大きく異なっていたと思われる。そのため、以下ではヘクサムを除く 5 組の調査対象と調査方法について、比較、検討する。

調査対象についてだが、プリンス＆リッチーズ、イヴァキヴ、ボウマンはいずれもグラストンベリーという町全体を対象にし、その中でもプリンス＆リッチーズ、イヴァキヴはコミュニティ、ボウマンは土地に固有の物語に焦点を当てている。一方のセージとヒルズ＆ウェルフォードは、それぞれ女神運動と補完代替医療の利用者という、町の特定のグループを対象としている。

調査方法をみると、プリンス＆リッチーズ、イヴァキヴ、ボウマン、セージはインタビューと参与観察を主とする文化人類学の方法を用いている。セージは短期の住み込み調

査だが、プリンス＆リッチーズとイヴァキヴは比較的長期間の住み込み調査を実施している。ボウマンは車で通える距離に住んでいるため、居住したことはないが、本稿を執筆している 2022 年時点でもグラストンベリーで調査をし、論文を発表し続けており、携わっている期間は最長である。一方のヒルズ＆ウェルフォードの場合、大規模なアンケート調査を主体とする社会学の方法をおもに用いており、他の 4 組のように参与観察は行っていない [3)]。

つまり、本稿はグラストンベリーに焦点を当て、長期の文化人類学的な調査にもとづき、全体的なグラストンベリー像を提示したプリンス＆リッチーズによる民族誌の延長線上にあると位置づけられる [4)]。この民族誌では、キリスト教のコミュニティに対置させる形で、オルタナティヴ・コミュニティとしての姿が描き出されている。

本稿では、グラストンベリーが聖地とみなされてきたこと、そのようなグラストンベリーが商品化されていること、商品化により新たな訪問者を引き寄せていることをみていく。そのうえで、神秘的な「アヴァロン」と現実的な「グラストンベリー」というこの町に対する 2 つの側面を明らかにすることで、現在のグラストンベリーを支えている要素について検討し、グラストンベリー像の提示を目指したい。

本稿は 2005 年と 2006 年の合計 8 か月にわたる現地調査にもとづいている。調査方法は、参与観察とインタビューを併用した。宗教の儀式や催し物、町で開催されているさまざまな催し物を参与観察した。インタビューについては、事前に電話やメールで連絡を取り、録音機器を使用した公式なもの、友達として話したおしゃべり、知り合いとの文書を通したやりとりまで含んでいる。インタビューを実施した人とは、町での偶然の出会いや、インタビューを行った人からの紹介で知り合った。公式なインタビューを実施したのは 41 人、非公式なものも含めると合計 84 人に話を伺った。インタビュー対象者は、女性が男性より約 1.5 倍、多かった。

2　聖地と呼ばれる町

ある場所が聖なる場所とされるのは、「場所」に関係する場合と「人物（神）」に関係する場合がある［植島 2005: 27］。これらはともに、特別とみなされる場所に一般の人々が集うようになったとする見解である。それに対して、「人が集まることで、特別な磁場が形成され、そこが聖地となる」［植島 2005: 28］という見解もありうる。ここでは場所と人間という視点から、グラストンベリーが聖なる場所と考えられてきた様子をみていく。

2.1　土地自体がもつ本質的な特別性

植島の議論に沿うならば、グラストンベリーが聖地とみなされ、一般の人々が訪れるようになった要因としては、まず、グラストンベリーという土地そのものに特別性が見出された場合がある。

たしかに、グラストンベリーはエネルギーの供給源だという見方がある。この町はかつて、イギリスやアイルランドの先住民ケルト人の聖地であり、ケルトの神官ドルイドの学校があったといわれている。

> 今、キリスト教の聖地といわれている場所の多くはもともと、ケルト人の聖地だった。聖地とされる場所はエネルギーが強いから、ケルト人も後からやってきたキリスト教徒も、このエネルギーに魅かれて、同じ場所を聖地にしたんだよ。【2006 年 8 月 6 日、インタビュー】

これは、あるドルイドの語りだ。また、あるキリスト教神秘主義者はグラストンベリーの特殊性について次のように語る。

> グラストンベリーはスピリチュアルなエネルギーが他の場所より強いから、新石器時代からスピリチュアルな人々が引き寄せられてきたんだ。エネルギーの強さには強弱の波があって、修道院が造られた中世にはもっともスピリチュアルなエネルギーが強かった[5]。そして、今はまた、当時のように強くなってきている。昔からスピリットが人々を魅きつけていて、今ここにいる僕たちはそのもっとも最近やってきた人々なんだよ。【2006年5月26日、インタビュー】

彼の話からは、グラストンベリーではスピリチュアルなエネルギーが強いため、本質的に特別であり、ここに来る人々はそのエネルギーに引き寄せられてやってきたと考えていることがわかる。ここでは特別性の根拠は、場所そのものにある。

エネルギー・スポットとしてのグラストンベリーは、レイラインの交差地点と、エネルギー供給源としてのグラストンベリー・トールの2つの視点から語られることが多い。

レイラインは正式には「レイ（ley）」だが、通常レイラインと呼ばれる。たとえば「ある特定の地点で目立った地形を結ぶ、目に見えないラインである。実用的なレベルでは、かなり離れた地点から別の地点へと旅人を導く、航行の助けとして使われているが、もっと神秘的なレベルでは、意味が忘れられた幾何学を表す何か、あるいは形而上学的な力がもっとも強い場所を示す何かだと信じられている」［Lloyd 2001: 45］のように説明される。もう少し具体的には、古代の遺跡や墓地、中世の教会、古い泉と丘の頂上など、重要とされる場所を結んだ一直線であり、イギリスには数多くのレイラインが通っているといわれている。グラストンベリーにはもっとも強力なレイラインである聖マイケル・ライン[6]が聖メアリー・ライン[7]と交差しているため、地球のエネルギーがとても強力だとみなされている［Bowman 1993: 33］。

もう1つは、町外れの丘グラストンベリー・トールをエネルギーの源だとみなす視点である。トールのエネルギーの流れについて、ニコラス・マンの見解を引用してみよう。

> トールの頂上で中心となる地点は、天上の次元とつながり、エネルギーをつぎ込むための地点である［Mann 2004: 79］。
>
> 円錐形のトールの鏡像のイメージとして、天から降りてくる漏斗、またはトールの頂上から昇ってくる漏斗と考えてもいい。同様に地球は、トールの特性を生かして空からの凝縮されたエネルギーを受け取り、仲介するように、空は地上の次元から伝わるエネルギーを受け取る。［Mann 2004: 80］

これは、トールから得られたエネルギーが、グラストンベリー全体に行き渡ることで、この町は特別になっているという見解だといえよう。実際、あるヒーラーは「トールに来ると、元気が湧いてくるでしょう。それはトールを登るにつれて、体にエネルギーが満たされていくからなのよ」【2006年8月6日、インタビュー】と語っている。

2.2　訪問した人物がもたらした特別性

ここまで挙げた話はすべて、グラストンベリーの特殊性を土地自体にあるとみなす視点から語られている。続いて、当地にやってきた2人の特別な人物、アリマタヤのヨセフとアーサー王を取り上げ、神話や伝説上の人物からグラストンベリーという土地が特殊と考えられていくようになった場合についてみていく。

アリマタヤのヨセフは、イエス・キリストの大叔父にあたる人物で、最後の晩餐[8]で使われた聖杯[9]と、処刑時にキリストの体

内からあふれた血液と体液を小瓶に入れて、1 世紀に当地を訪れたといわれる。

> この泉の水は、鉄分を豊富に含んでいて、泉の周囲を赤く染め上げてしまうことから、「赤の泉」とか「血の泉」としても知られている。（中略）泉の水をグラスに数滴垂らし、他の飲み物を加えて、一日に数回飲むだけで、ヒーリング効果が期待できる。（中略）伝説では、アリマタヤのヨセフが聖杯と小瓶を丘に埋めたところ、赤っぽい水がキリストの血とともにあふれ出したといわれている。［The Chalice Well Trust N.D.］

この泉は今、レッド・スプリング、あるいはチャリス・ウェルと呼ばれ、周辺は庭園として整備され、トラストが管理している。この水は 18 世紀半ばから、病気を治癒するのに効果があるという話が広まった［Lloyd 1999: 17］。アリマタヤのヨセフやイエス・キリストといったキリスト教における特別な人物が関わっているという伝説が、チャリス・ウェルの水の特殊性の根拠となっているといえる。

つぎに、アーサー王の伝説をみていく。アーサー王は 6 世紀頃の伝説上の英雄で、侵入してきたサクソン人から、イングランドを守ったとされている。息子モードレットとの最後の戦いに敗れ、傷を癒すためにアヴァロン島に運ばれ、復活の時を待っているとされる。このアヴァロン島はグラストンベリーであるというのが、イギリスでは定説になっている。というのも、12 世紀、グラストンベリー修道院の僧が見つけた棺の下から「この遺体はアーサー王のものである」とラテン語で書かれた鉛の十字架が現れたからである。その棺は修道院の墓所に再び埋葬されたが、16 世紀に修道院が解体された後、行方はわからなくなった。しかし、ポリー・ロイドは次のように述べる。

> 1934 年に行われた再発掘の際、その地点は再発見され、今日でははっきりと印が付けられている。アーサーの最後の休息の地がグラストンベリー、古代のアヴァロン島だったと人々の心に焼きつけるにはこれで十分なのだ。［Lloyd 1999: 32］

この話から、歴史学上は伝説の人物であるとされているアーサー王を実在の人物とみなし、グラストンベリーはアーサー王に関わりがあるという伝説をもとに、グラストンベリーを特別な場所とみなす視点が伺える。

2.3　人が創り出した人工的な特別性

最後に、一般の人々が集まることで聖なる場所になったと考えるグラストンベリー観をみていこう。グラストンベリーが特別な場所であるのは、ここに集う人間がそのように想像したからだという人がいる。町を訪れていた、あるカナダ人学生は、次のように記す。

> レイラインとか、グラストンベリーを本質的に特別とみなす考え方は信じていない。でも、グラストンベリーは人々が特別だと想像するようになった場所で、想像の中で特別な場所を創り出したのよ。神話生成の歴史は長いから、人々はそこから使えるアイディアを沢山もらったの。住んでいる人、訪れる人、人々がグラストンベリーを特別にしたのよ。【2006 年 8 月 12 日、個人的な電子メール [10]】

彼女はこの町を特別な場所であるとみなしているが、本質的に特別だとみなす考え方を否定する。そして、人々が神話をもとに特別な場所だと想像し、特別な場所として創り出されてきたといい、グラストンベリーの特別性は人工的なものだと考えている。

グラストンベリーには何かエネルギーがあると思うかという問いに対して、先ほどとは別のヒーラーは次のように語った。

> 人々がここには強いエネルギーがあると言うなら、強いエネルギーがあるんだと思う。（中略）よくわからないけど、ここは特別な場所だと信じているよ。けれど、世界には特別な場所が沢山ある。実際、結局のところ、場所より人が関係しているんだ。【2006 年 5 月 15 日、インタビュー】

彼も、グラストンベリーが特別な場所だと認めている。しかし、唯一の特別な場所ではなく、そのような特別な場所は他にも沢山あると言う。そして、特殊性を場所そのものではなく、そこにやってくる人々がそのように考えているからという点に求めている。これも、場所の特別性は人が創り出すものだという視点である。

長年グラストンベリーに暮らす、あるフランス人は次のように語った。

> グラストンベリーに来る人たちは、ここで何らかの利益を得たと言って帰っていくけれど、彼らも何かをこの土地に贈って帰っている。そのことによってこの場所もまた元気になっていくのよ。ずっとそうだったのよ。【2006 年、インタビュー】

彼女も、この町の特殊性は集まってくる人々にあると考えているといえよう。訪れる人がいるからこそ、グラストンベリーは特別な場所であり続けているのである。

3　聖地の商品化

前章でみてきたように、その根拠が場所であれ一般人であれ、当地は長い間、聖地とみなされてきた。歴史的に何らかの顕著な特徴をもつ町が商品化される事例はこれまでにも報告されている。たとえばタニス・フォルツは、魔女の町として有名なアメリカ合衆国東部マサチューセッツ州のセーラムでは、魔女が使うような道具や、魔女人形が土産物として売られていること、観光客向けのセーラム魔女博物館が設立されていることを報告している［Foltz 2005: 138-139］。同様に特別な場所としてのグラストンベリーのイメージも商品化されている。

グラストンベリーに関連するものが商品として販売されている様子は、たとえば町の土産物店でみることができる。グラストンベリー修道院の土産物店では、修道院の建物の復元模型や「この遺体はアーサー王のものである」と書かれた十字架の複製品が販売されている。チャリス・ウェルの土産物店では、チャリス・ウェルの水が入ったペンダントが販売されていて、これを身につけていれば、つねにヒーリング効果を得られると説明書きにある。さらに、グラストンベリーにまつわる神話や伝説、神秘的現象を個人で研究している人々による書籍も多数出版されている。

当地の場合、グラストンベリー産というだけで商品に付加価値がつき、「グラストンベリー・ブランド」とでもいうべきものが生み出されている様子がみられた。続いて、付加価値がつけられた商品の事例を 2 つみていこう。

グラストンベリーにはスピリチュアリティ関連のコースを提供しているアヴァロン島協会（Isle of Avalon Foundation, 1995-2021）という非営利団体がある。アヴァロン島という名称を使用していることから、聖地としてのグラストンベリーを強く意識しているともいえるのだが、2006 年に収集したコースを紹介するパンフレットには、次のようにある。

> 夕方のトークから週末の入門ワークショップ、専門的なトレーニング・プロ

> グラムまでいろいろと取り揃えています。（中略）アヴァロン島協会では、これらすべてを体験できるうえに、グラストンベリーという聖なる場所で学ぶことができます。

アヴァロン島協会の理事の1人ヘイゼルは、ロンドンのあるスピリチュアリティ・イベントのブースでアヴァロン島協会のワークショップを宣伝したときの様子について、次のように話した。

> 興味をもって話を聞いてくれる人が結構いてよかったわ。「グラストンベリーでやっている」っていうことが魅力らしいのね。だから私たちはそこを強調して説明したっていうわけ。【2006年、インタビュー】

アヴァロン島協会で実施されているワークショップは、グラストンベリーという土地そのものと特別関係が深いわけではないし、講師はグラストンベリー以外の町でワークショップを行うこともある。しかし、グラストンベリーで実施されているワークショップということで、アヴァロン島協会のワークショップは他の場所で実施されている類似のワークショップより価値が高まった、つまり付加価値のついた商品になったのだといえよう。ヘイゼルたちもそのようなワークショップの商品価値を意識して、宣伝活動を行っていると思われる。

ハーブとエッセンシャルオイルの店スターチャイルド（Starchild）で売られているハーブは、「アヴァロンのベールという魔法の季節が生み出した自然のリズミカルなプロセスに生命を与えられたグラストンベリーのコレクション」とカタログには記されている。この店でハーブを購入した、ある日本人はその理由を次のように語った。

> せっかく来たんだから、何か買おうかなと思って。グラストンベリーで売っているものって、なんだか特別な気がする。【2006年9月25日、インタビュー】

スターチャイルドのある店員の話によると、この店で扱っているハーブのすべてがグラストンベリーで摘みとられたわけではなく、イギリス各地で採集されている。したがって、同様の品質のものを他店で購入することは可能である。地元で薬草療法に携わる女性はこの店のハーブについて、「ふつうのハーブ店より、3倍ぐらい値段が高いのよ」【2005年11月28日、インタビュー】と嘆いていた。これらの話から、スターチャイルドの商品は、特別な場所グラストンベリーで販売されているということで付加価値がつき、高値に設定されていると考えられる。

さらにスターチャイルドのハーブは、イングランドの別の町でも販売されている。たとえば、コーンウォール州ペンザンスにあるスピリチュアルな商品を扱う店の店員は、「スターチャイルドのハーブは、グラストンベリーのものってことで、この辺りの人にも人気が高いんだ」【2005年12月12日、インタビュー】と話していた。この話からも、グラストンベリー産ということだけで、スターチャイルドのハーブには付加価値がつき、ブランド化されていることがわかる。

4　聖地への新たな訪問者

聖地としてのグラストンベリーが商品化され、グラストンベリー以外の場所でそれらの商品が販売されるようになった。その結果、そのような商品を購入して、何らかのグラストンベリーのイメージをもって、当地を訪れる人も出てきている。

あるチベット系カナダ人は、丹念に読み込まれたグラストンベリーの解説書をもって、グラストンベリーにやってきた。そして、アー

サー王の棺が見つかったとされる地点を修道院跡地の中で探していた。

> 本によると、この辺りなんだけどなぁ。あ、あったわ。ここよ、ここでアーサー王とグィネヴィア王妃の墓が見つかったんだわ。この本には、ここに立つとちょうどトールが見えるってある。この真下にトールからのレイラインが通っていて、別のレイラインと交差しているんだって。だからこの地点は特別で、ここにアーサーは埋められていたのよ。【2005 年 11 月 25 日、インタビュー】

彼女のもっていた解説書は、『アヴァロンの自然 (*In the Nature of Avalon*)』［Jones 2000］というグラストンベリーの地形とその神秘について書かれた書籍である。彼女はこの本に影響を受け、ずっとグラストンベリーを訪れたいと考えていた。とりわけアーサー王伝説に関係の深いグラストンベリー修道院に行き、アーサー王の墓が見つかった場所を見てみたいと思っていた。彼女の話から、グラストンベリーやアーサー王が執筆の対象となることで商品化され、これまでグラストンベリーを知らなかった人を引き寄せているといえる。しかし、こうも話した。

> アーサー王の眠る町っていうから、もっと神秘的で静かなところなのかと思っていた。結構騒々しいのね。でも、エリコ（＝筆者）みたいな人に出会えて、楽しい話ができてよかったわ。【2005 年 11 月 25 日、インタビュー】

この発言は、アーサー王の墓がある神秘的で静かな町という、当地を訪れる前に抱いていたイメージと、現実のグラストンベリーの姿はまったく同じものではなく、その間の溝に気づいたことを表しているといえる。

先ほどとは別の日本人訪問者は、グラストンベリーにやってきた理由と、町での行動について次のように語った。

> 私、日本でオーラ・ソーマ[11]をやっているんだ。オーラ・ソーマで使っている容器の中に入っている水が、チャリス・ウェルの水だって知って、どうしてもチャリス・ウェルに行きたくて、ここに来ちゃったの。チャリス・ウェルだけが目的だったから、この町がアーサー王伝説で有名だとか、そういうことは全然知らなかった。だからチャリス・ウェルに行ったら、入り口のおばさんに「トールや修道院にもぜひ行きなさいよ」って強く勧められて、げんなりしちゃった。チャリス・ウェルの中で 4 時間ぐらいぼーっとして、抜け出せなくなりそうだった。でも、せっかくだと思って、思い切って（トールや修道院に）行ってみたら、結構よかった。行ってみてよかったよ。【2006 年 9 月 25 日、インタビュー】

チャリス・ウェルの水からグラストンベリーの存在を知り、チャリス・ウェルのイメージだけをもっていたという話からは、商品が町のイメージを固定化していたといえる。しかし、さまざまなスピリチュアルな事柄がみられるこの町を訪れることで、彼女はチャリス・ウェル以外のグラストンベリーも知ったといえよう。

5　2 つの顔をもつ町

特別な場所というグラストンベリーのイメージが、具体的な商品になることで、グラストンベリーから遠く離れた場所でもグラストンベリーのイメージが流布していくようになる。商品として扱うべきでなかった事柄が商品化されると、多くの人々を魅きつけるようになるという利点はあるが、ステレオタイプ化を推し進めるという欠点もある。グラス

トンベリーの場合でも、商品化によって、チベット系カナダ人や２人目の日本人訪問者のようにこれまで当地を知らなかった人々の関心を引くことになった。一方で、アーサー王の墓がある町とか、チャリス・ウェルのある町というように、町の特別性の根拠が１つに固定化してしまうということも生じていた。しかし、２人の事例からわかるように、グラストンベリーを実際に訪れることで、固定化されたステレオタイプは崩されていくといえる。

冒頭で述べたように、グラストンベリーはアヴァロンと呼ばれることがある。「アヴァロン」が個人の内的な世界、神秘的な世界を指すのに対し、「グラストンベリー」は外的な世界、ふつうの人々の目に見える現実の世界を指しているともいわれる。この視点から事例を検討していくと、チベット系カナダ人のもっていたアーサー王の眠る土地というグラストンベリーのイメージは、彼女個人の内的なイメージなので「アヴァロン」である。彼女は自分のもっていたアーサー王の墓がある「アヴァロン」を堪能しつつも、想像とは異なる騒々しい「グラストンベリー」に対峙し、その現実の世界で筆者のような他者と出会うことになった。一方、２人目の日本人にとっての「アヴァロン」はチャリス・ウェルだといえる。彼女は「アヴァロン」であるチャリス・ウェルを楽しんだが、町を訪れることで、現実の「グラストンベリー」にはトールや修道院、アーサー王伝説などチャリス・ウェル以外にもさまざまな事柄があることを知る。グラストンベリー＝チャリス・ウェルというイメージは崩されたものの、「アヴァロン」としてのチャリス・ウェルのイメージを保持しつつ、現実世界の「グラストンベリー」にも出会ったといえる。

これらの事例から、スピリチュアル探求者にとってグラストンベリーは、神秘的な世界としての「アヴァロン」と現実の世界としての「グラストンベリー」という２つの側面をもつことが明らかになったといえよう。「アヴァロン」とは、自分の中ですでに確立している信条をさらに追求する場であるといえる。この町に神秘的な何かがあると考えて訪れた人々は、自分の信条にもとづく「聖地」に赴き、自分の信条に従った解釈をしていく。それに対して、「グラストンベリー」は新しい出会いを与える現実の場である。スピリチュアリティに関心のある人々が集まってきたことから、町の中には品物やワークショップなどスピリチュアリティに関係のある事柄が提供されている。スピリチュアリティに関心のある人々とスピリチュアリティについて話すこともできるし、来るまでは知らなかった新たな伝説や遺跡に出会うこともある。人々はこの町で新しい何かに出会うのである。

この２つのグラストンベリー観は、ある個人にとって相反するものでなく、１つの町に対する２つの見方であるといえる。グラストンベリーという聖地は、自己探求の場としての神秘的な世界「アヴァロン」であると同時に、その世界への入口であり、新しい出会いの場でもある現実の世界「グラストンベリーである。つまり、「アヴァロン」と「グラストンベリー」は１つの町の２つの顔であり、１つのスピリチュアルな場を支えているのである。

6　おわりに

本稿では、スピリチュアルなコミュニティとしてのグラストンベリーの姿を提示した。聖地グラストンベリーは商品化により固定化、理想化され、さまざまなイメージが流布していったが、実際に訪れた人々は自分でもっていたアヴァロンを個人的に楽しみつつも、グラストンベリーという現実の世界で新しい考え方や人々に出会っていた。本稿はプリンス＆リッチーズの研究の延長線上にあるが、そこでは、キリスト教とオルタナティヴ・

コミュニティの間に線引きがされてきた。しかし本稿では、グラストンベリーが信条に関係なく、特別な場所とみなされてきたこと、アヴァロンという神秘的な自己探求の場と、グラストンベリーという現実にある新しい出会いの場としての２つの側面をもつこと、そしてこの２つの側面は対立するものではなく、ある個人の中で共存可能なものであることを明らかにした。

グラストンベリーにおける調査や研究を支援しているトラストの代表は、帰国間際の筆者に対して、「グラストンベリーを本格的に調査しようとしたのは君が初めてだったから、印象的だったよ」【2006 年、インタビュー】と言った。彼はボウマンなど、他の調査者とも知り合いであるにもかかわらず、そう言ったのである。彼によると、ここで調査する研究者は、町で見られる一部の事柄を対象にし、ニューエイジやスピリチュアリティの一事例として分析していて、グラストンベリーという町自体を調査しようとする研究者は初めてだと言うのだ。プリンスはコミュニティに溶け込み、その民族誌においてオルタナティヴ・コミュニティとしてのグラストンベリー像を提示したが[12]、それ以降は町全体を対象にして、グラストンベリーを長期間、調査するという研究は実施されてこなかったといえる。

本稿では、プリンス＆リッチーズが強調したようなキリスト教徒とニューエイジャーの分断されたコミュニティというより、異なる見方が共存する１つのスピリチュアルなコミュニティこそがグラストンベリーの姿だと結論づけた。

付記

「アヴァロン」と「グラストンベリー」の概念については、［Bowman 1993］の他、グラストンベリーの住人との会話やボウマン博士本人から示唆を受けた。

本稿は 2006 年度、京都大学大学院人間・環境学研究科に提出した修士論文「スピリチュアルな日常を生きる――英国グラストンベリーにおけるヒーリング実践と女神運動を事例に」の第３章を加筆修正したものである。データを収集したのは 2005 ～ 2006 年であるが、筆者は本稿を執筆している 2022 年時点でもグラストンベリーで調査を続けており、本稿で記した状況はあまり変わっていないと思う。また、調査の初期段階だからこそ収集できたデータもあり、改定は最小限にとどめた。インタビューの日付は、わかる範囲で記した。

〈注〉

1)　グラストンベリー一帯の土地は干潮時の海面より低い。そのため、200 年ほど前までは冬になると、町外れの高さ約 158 メートルの丘、グラストンベリー・トールその一帯を除く一面が水で覆われていた。そうなると、この丘が島のように見えることも、グラストンベリーとアヴァロン「島」が結びつけられた背景にあった。

2)　ニューエイジについては、本号掲載の筆者による論文「現代のイギリスにおけるヒーラーたちのヒーリング」を参照してほしい。

3)　ヒルズは執筆当時、ロンドンのタヴィストック研究所の研究員であった。2020 年、地元のある機関と提携してグラストンベリーに関する報告書を発表していること、また 2021 年に 73 歳で亡くなった際にはグラストンベリーで葬儀が行われていることから、グラストンベリーに暮らしていた、あるいはいつかの時点で移り住んでいた可能性もある。またウェルフォードは執筆当時、グラストンベリーに近い小さな村に暮らし、グラストンベリーのクリニックに勤めていた医師である。

4)　ただし、現地調査を実施したのは、おもにプリンスである。

5)　グラストンベリー修道院は、中世にはイングランドでもっとも重要とされる修道院の

1つだったが、ヘンリー8世が行った修道院の解体にともない、1541年までに閉鎖され、その財産は没収された。現在ではその廃墟が残っているだけである。最後の修道院長はグラストンベリー・トールの上の聖マイケル塔で絞首刑とされ、その遺体は頭部と4つの胴部に分けられ、異なる町に埋められたのだが、それはこの修道院のスピリチュアルなエネルギーがかなり強力だったため、ヘンリー8世が恐れていたからだといわれている。

6) イングランド南西部のコーンウォールにある聖マイケル・マウントから、グラストンベリー・トールの上に立つ聖マイケル塔、巨大環状列石で知られるエイブベリーを通り、イングランド東部のノーフォークのホプトンに抜けるラインである。

7) グラストンベリー修道院から環状列石として有名なストーンヘンジを通り、カンタベリー大聖堂へと結ぶラインである。

8) キリスト教における最後の晩餐とは、聖書によると、イエス・キリストが処刑される前日に開かれた晩餐会。この席でイエスは翌日の自らの処刑と弟子たちの裏切りを予言した。

9) イエスが最後の晩餐で使用したとされる杯。神話や伝承によると、聖杯はその中に注がれたあらゆる物質をエリキシルという不老不死の薬に変えてしまうとされている［The Chalice Well Trust N.D.］。

10) この女性とは2006年8月2日に出会い、6日にインタビューを申し込んだが、短期の滞在のため、滞在中は難しいということで、後日電子メールで連絡をいただいた。

11) イギリス発祥で、色のついた水の入ったボトルを使うカラーセラピーの一種。

12) ただし、プリンスの調査は、このトラストが設立される前に実施された。筆者の調査時点で、ボウマンがグラストンベリー研究者として町の人々に知られていたのに対し、プリンスの名前を挙げる人は皆無だった。プリンスはグラストンベリー近くの村の出身で、筆者はだいぶ後に、プリンスの幼馴染に偶然出会い、彼女は研究者にならなかったと聞いた。この点も関係しているかもしれない。

〈参照文献〉

植島啓司　2005(2000)『聖地の想像力――なぜ人は聖地をめざすのか』集英社新書。

Bowman, Marion 1993 Drawn to Glastonbury. In Ian Reader and Tony Walter eds. *Pilgrimage in Popular Culture*. Basingstoke and London: The Macmillan Press, pp. 29-62.

Bowman, Marion 2000 More of the Same? Christianity, Vernacular Religion and Alternative Spirituality in Glastonbury. In Steven Sutcliffe and Marion Bowman eds. *Beyond New Age: exploring alternative spirituality*. Edinburgh: Edinburgh University Press, pp. 83-104.

Bowman, Marion 2003-2004 Taking Stories Seriously: Vernacular Religion, Contemporary Spirituality and the Myth of Jesus in Glastonbury. *Temenos* 39-40: 125-142.

Bowman, Marion　2004　Procession and Possession in Glastonbury: Continuity, Change and the Manipulation of Tradition. *Folklore* 115(3): 273-285.

Bowman, Marion 2005 Ancient Avalon, New Jerusalem, Heart Chakra of Planet Earth: The Local and the Global in Glastonbury. *Numen* 52(2): 157-190.

The Chalice Well Trust N.D. *The Chalice Well* (leaflet). Glastonbury: The Chalice Well Trust.

Foltz, Tanice G. 2005 The Commodification of Witchcraft. In Helen A. Berger ed. *Witchcraft and Magic: Contemporary North America*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, pp. 137-168.

Glaston Group 2006 *Glastonbury: A Pilgrim's Perspective* (Revised Edition 2006). Glastonbury: Glaston Group.

Hexham, Irving 1971 New Age Thought in Glastonbury: Some Aspects of the Contemporary Search for an Alternative Society [In Glastonbury, England, 1967-1971]. Unpublished MA thesis submitted to the University of Bristol.

Hills, Dione and Dr Roy Welford 1998 Complementary Therapy in General Practice: An Evaluation of the Glastonbury Health Centre Complementary Medicine Service. Somerset Trust for Integrated Healthcare (private print).

Ivakhiv, Adrian J. 2001 *Claiming Sacred Ground: Pilgrims and Politics at Glastonbury and Sedona*,

Bloomington: Indiana University Press.
Jones, Kathy 2000 *In the Nature of Avalon*. Glastonbury: Ariadne Publications.
Lloyd, Polly 2001(1992) *About Glastonbury*. Launceston: Bossiney Books.
Mann, Nicholas R. 2004 *Energy Secrets of Glastonbury Tor*. Sutton Mallet: Green Magic.
Prince, Ruth and David Riches 2000 *The New Age in Glastonbury: The Construction of Religious Movements*. New York and London: Berghahn Books.
Sage, Vanessa E. 2005/2006 Sitting with Your Own Tree: Pilgrims and Pilgrimages in Glastonbury. *The International Journal of the Humanities* 3(7): 43-47.

（2022 年 12 月 5 日受理）

‘Avalon’ and ‘Glastonbury’:
Two Aspects in a Sacred Place

Eriko Kawanishi

Keywords
Sacred place, Energy, Ley, Joseph of Arimathea, King Arthur

Glastonbury, a town in the southwest of England, is known as one of the spiritual centres in the West. This town is said to overlap with Avalon, a legendary island where King Arthur was taken to recover. In this town, you will find many people who are interested in spiritual matters as well as spiritual goods and workshops. Based on my fieldwork, this paper examines how Glastonbury has been regarded as a sacred place, how it has been commercialised and how this commercialisation has attracted new visitors.

The various fixed and idealised images of Glastonbury have been born and have spread by commercialization. Those who have actually visited have enjoyed their personal image, which they brought with, in their own mind, while they have communicated with people and meet new ideas in the real world.

Glastonbury has been regarded as a special place regardless of creed. It has two aspects; Avalon as a mystical place of self-development, and Glastonbury as a real place of encountering new ideas and people. These two aspects are not in conflict with each other, but can coexist within an individual. This paper points out that Glastonbury is one spiritual community where different perspectives can coexist.